【フォーラム】

アイヌ語の 1 を示す数詞 *

切　替　英　雄
（北海学園大学）

キーワード：アイヌ語，数詞

1.　目的

いろいろな言語の数詞にみられる算術的構造の多様さは，個々の数詞の体系が文化により異なる過程を経て成立したことを示している（たとえばアイヌ語がそうであるけれど，50 が 20×3–10 として示されるようなとき，20×3–10 を数詞 50 の算術的構造と呼ぶことにする）．

そうした過程の一つとして，1 を示す数詞が 2 の概念から生まれるということがありえたのではなかろうか（その場合 1 を示す数詞の算術的構造は 2×½ ということになる）．アイヌ語がその例だといえるのではないか．そのような仮説を立てて，アイヌ語の 1 を示す，今まで触れられることの少なかったもう一つの数詞の成立を跡づけることにした．

2.　基本数詞

アイヌ語には次の基本数詞がある．

---

* 本論文は初め「アイヌ語のもう一つの 1」と題して「北海道民族学会および日本文化人類学会北海道地区平成 16 年度第 1 回研究会」（北海道大学 2004 年 6 月 27 日）で話され，翌年『北海道民族学会会報』（創刊号 2005 年 7 月）に掲載されたものに大幅な加筆訂正をほどこしたものである．

例文は，参考文献としてあげたアイヌ口承文学のテキストから得た．テキストのほとんどは叙事詩であるので，行の区切りをスラッシュで示した．そのほかに，砂沢クラ氏（1897–1990），沢井トメノ氏（1906–2006）という二名のインフォーマントから直接得られたものもある．

1 siné	6 iwán	20 hót
2 tu	7 árwan	
3 re	8 tupésan	
4 íne	9 sinépesan	
5 asíkne	10 wán	

このうち tu「2」と re「3」が後接語（前倚辞 proclitic）であること（setá「犬」，tu séta「2 匹の犬」．tu séta ではアクセントが一つ前に移動して，全体であたかも一つ単語のような体裁になっている），íne が例外的なアクセントを示すこと（アクセントが第一音節にある），tupésan「8」と sinépesan「9」がそれぞれ tu「2」と siné「1」を内部に含むこと，hót「20」が名詞であるのを除いてほかはすべて連体詞であること（tu séta「2 匹の犬」に対して hót ne setá「20 匹の犬」．hót は名詞であるから繋辞の né をとり連体修飾句をなす）などが注意される．

これらの基本数詞は，細部の異同はあるものの知られているすべてのアイヌ語方言に共通するから（服部 1964: 260–267），Proto-Ainu にはすでに出そろっていたと考えるのが適当である．ところが，個々の数詞を分解して語の由来を解明しようという人々がいる．

たとえば，1 を示す数連体詞 siné（siné seta「1 匹の犬」）が二次的に発生した，という説がある．それはほんの仮説にすぎないが，金田一京助，知里真志保が説いたものである．金田一（1935/1993: 103–104）は指折り数えるときの指の名（shi mompet「親指」）と関連づけて，si が「大」「真」の shi に由来し，ne は名詞を形容詞化する語尾であると説く．名詞を形容詞化する語尾とは，上で述べた繋辞の né（hót *ne* setá「20 匹の犬」）のことである．知里（1936/1974: 57）は shi には「本」「真」「自身」などの意味があるとしている．si の用例としては次のような複合語をあげることができる．

（1） *si*-annoski「真夜中」，*si*-apekes「大きな燃えさし」，*si*-pase「真に尊い」，*si*-kiru「身を翻す」←kiru「回す」など（si が接頭した以上の派生語は切替（2003）の『アイヌ神謡集辞典』より）．

知里が，いわば強調の si「本」「真」のほかに再帰接頭辞の si-(kiru)「自身」

（self）をあげているのは興味深い．

ところが算術的構造が疑いなく明らかなのは tupesan「8」（10-2）と sinepesan「9」（10-1）だけである．そのほかの基本数詞は，siné も含めて算術的構造はおろか構成要素の抽出さえ満足にできない．確かにこれまでにいろいろな試みがあった．しかしここではそれに触れない．注意しておかなければならないことは，siné の二次的派生説の致命的ともいえる欠陥は「真の」という意味で用いられている siné の例（いわば強調の siné の例）を金田一，知里ともに示すことができなかったということにある．金田一（1935/1993: 104）自身がそれを認めている．いずれにせよ，基本数詞の分析からえられるこのような仮説は Proto-Ainu 以前の Pre-Ainu に関わることである．

本稿で考察されるのも，近代になってテキスト化された口承文芸の言語の分析に基づくとはいえ，やはり Pre-Ainu に関わることである．アイヌ語には同系統の言語が発見されていないから，Pre-Ainu のこととして想定される事柄に対して確実な証拠をあげるのは不可能である．従って，そのような想定は金田一，知里説と同様，ほんの仮説にすぎない．しかし，まず，主に胆振地方の方言による口承文芸のテキストを調べ，従来あまり取り上げられなかった 1 を示すもう一つの形式を見てみよう．その上で，1 を示す二つの形式が並立することの意味を考えたい．

3. 1 を意味する ár

田村（1996: 20）の『アイヌ語沙流方言辞典』には，次のように接頭辞 ar- の二つの意味が紹介されている（沙流（さる）は日高地方西部，沙流川流域の名．Dettmer（1989: 791–794）の *Ainu-Grammatik* では ar- に関する諸家の記述が整理され示されていて，参照に便利である）．

（限られた決まった語に接頭して）一つの…

（一つのものを二つに分けた）一方の／片割れの…

-suy 振り（＝回数の単位）；*ar*suy 一回.

kewtumu（彼の）心；*ar*kewtumu（彼の）心の半分／片方．*ar*kewtumu wen *ar*kewtumu pirka 片一方の心は悪い片一方の心は良い.

ár が 1 を示す例として，十勝地方本別に行われていた方言に次のような単語がある．

（2） *ár*-ukuran「一晩」（tu úkuran「二晩」，re úkuran「三晩」．沢井トメノ 1906–2006）

このような例は日高・胆振地方に伝承された口承文芸にいくつか見いだすことができる．

（3） *ar* inau-kike 一本の削り掛け：*ar* inau-kike / a-rekuchi-kote **一本の**削り掛けを｜私の頸に付けてくれた（久保寺 1977: 129）

（4） *ar* pakesh 一杯の盃：Epontureshi / oripak-an koroka / ouse *ar* pakesh / akore rusui. お身の小さい妹に｜失礼なれど｜たった**ひと**盃を｜さしあげたい（金成，金田一 1959: 104）

（5） *at*-tam「一刀」: Shirarbetunkur / chi*at*tamnere / aekarkar シララペッ彦が｜**唯一**刀に切ら｜れた（金成，金田一 1965: 196）

佐藤（1995: 42）が世に紹介した『蝦夷言いろは引』（弘化 5 年，1848 年 ?）には「一盞（イッサン）」に対して *sine* tuki と *ar*-tuki の二つの形があげられ，「一腰」に対して *sine* emus と *ar*-emus の二つの形があげられている．tuki「盃」，emus「刀」．それぞれシ子トキ，アリトキ，シ子ヱムシ，アリヱムシと書かれている．

なお田村があげていた ár-suy「一回」が siné とともに不特定な時を表す句に用いられることがあることも記しておかなくてはならない．

（6） *ara*suianita あるとき（金田一 1923: 172）←ar-suy an i ta

これは，これよりはるかに頻繁に現れる次の句とほぼ同じ意味を持つものであろう．

（7） *shine*anita とある日（金田一 1923: 92）←sine an i ta

従来の数詞に関する研究で，ár-suy「一回」については，予想される *siné suy ではない特異な形であることから，しばしば触れられるけれど（村崎 1979: 91，Tamura 2000: 258–259 など），先に引用した「限られた決まった語に接頭して」

（田村 1996: 20）という陳述以外には 1 を示す ár についての一般的な記述は見られない．しかし ár が siné とともに 1 を示していたことは疑いがないと思われる．ただし次節で述べるように ár-suy の ár を 1 を示す例とするのは不適切ではないかと私は考えている．

4. 「二つ一組の片方」「半分」を意味する ár

前の節で『アイヌ語沙流方言辞典』から引用して ár に「(一つのものを二つに分けた）一方の／片割れの…」つまり「二つ一組の片方」「半分」の意味があることに触れた．この意味の ár の存在は早くから気づかれていた．知里（1956/1984: 7）によれば次のような複合語があるという（8）．なお，ár の末尾の子音は弾き音 ɾ(日本語のラ行の子音に類似する)で, 後続する子音が歯茎音•口蓋音のときそれに同化ないし異化することによっていくつかの異なる形で実現される．

（8） *an*-nan 半顔，*an*-rur 山向こうの浜辺の地（太平洋沿岸の日高地方からみた，日本海沿岸の後志（しりべし）・石狩地方を指す．rur「潮」「海」），*at*-tek 片手，*at*-chake 対岸，*ár*-un-kotan あの世

さらに例を集めると：

（9） *ar*-moisam 入り江の向こう側の浜：*ar*moisam ta / payean yakne **向こう側の**浜に｜行くと（金成，金田一 1963: 41）

（10）*at*-tap 片一方の肩：*at*tap kashi / shikush rayochi / *at*tap kashi / ekai rayochi / chieomare **片**肩の上には｜日光の虹が｜**片**肩の上には｜半輪の虹が｜あって（金成，金田一 1961: 65–66）

（11）*ás*-sik 片目：Né áy ani pón yupi sikíhi tukán. *Ás*siki isám. その矢で小さい兄の目ねらってうって，**片**目なくした（砂沢クラ 1897–1990．遺稿より．原文はカタカナ書き．日本語訳も砂沢クラによる．石狩地方旭川方言）

以上の複合語は，いずれもいわば自然的なペアをなすものの片方を意味している．

次の ár も「二つ一組の片方」の意味と理解すべきであろう．

（12）*ár*-enko「半分」（十勝地方本別方言．日高地方沙流方言では aremko(ho) という形で存在する．田村 1996: 21）：*Á*renko kuóyra, *ár*enko kuésikarun. **半分**忘れたが，**半分**覚えている（沢井トメノ）

enko は宗谷・樺太方言の énko（kehe）「半分」，また，ほかの方言の émko「半分」と関係があるだろう（服部 1964: 223, 267）．そこで，ár-enko は「半分（に分けたもの）の片方」と解釈できる．

また田村が『アイヌ語沙流方言辞典』で 1 の例としてあげていた

（13）*ar*-suy「一回」（*ás*-suy 沢井トメノ．またほとんどの方言でも．服部 1964: 265）

を tu súy「二回」，re súy「三回」と比べると，ár は 1 を意味しているとしか思えないし，また前節でみたように sine an i ta「とある日」と並んで ar-suy an i ta「あるとき」のような例もあり，ますますその感を強めるのだが，この回数の単位 suy を副詞 suy「また」「再び」（次の（14）を参照）と関連付ければ，ár-suy は「再びの片方」，「再びの半分」を意味していたと推定できる．

（14）Shineanto ta / *sui* hotke-an wa / an-an awa, ある日のこと｜**また**わたしが寝て｜いたところが，（金成，金田一 1959: 332）

tu súy，re súy はそれぞれ「二つの再び」「三つの再び」ということになる．したがって ár-suy を ár の 1 を示す例としてよいかは微妙である．すくなくとも語源的には「二つ一組の片方」であったと考えられる．同辞典では suy が「振り（＝回数の単位）」とされている．おそらくこの suy を他動詞 suyé/súypa「揺する，振る」（単数・複数）と関係付けたものと思われるが，suy「振り」という語根の存在を示唆する例はこの他動詞の単複のペアのほかにはみられないし，「振り」と「回」は意味からいっても直ちには関連づけられないと思う．

次の例でも ár は「二つ一組の片方」ないし「半分」の意味で用いられている．

（15）*at*-tem 両手を広げた幅の半分“**Attem**, n. Half the distance one can attain by stretching the arms out.”Batchelor 1938: 61，鷹部屋福平 1941: 129–

130. sine tem 両手を広げた幅.「一間」「一尋」. tu tem「二間」, re tem「三間」(切替 2003: 400) tem は長さの単位. 本来は「腕」の意味. tem-nikor「腕の輪(の中に入れる=抱く)」砂沢クラ(遺稿).

自然的なペアをなさないもの, 対称的な二つの部分に分割できないものにも ár が用いられることがある. それは前の節で見たところである. そのような例では, ár は純粋に 1 を意味するものとなっていると考えられる.

ところで, ár が 1 の意味で用いられているのか,「二つ一組の片方」ないし「半分」の意味で用いられているのか, あいまいになることがある. 我々は久保寺逸彦(1992: 271)とともに, 次の例を見出す.

(16) *At*-tem pakno / tu-tem pakno / arpa-an ko 一間ほど | 二間ほど | われ行きては(金田一 1931: 795)

したがって

siné tem, tu tém, re tém, …

の系列と並んで

át-tem, tu tém, re tém, …

の系列が存在したと推定される. この át-tem は「半間」「半尋」ではなくて「一間」「一尋」と解せられる.

そのようなわけで, ár は 1 を示そうにも「二つ一組の片方」ないし「半分」の意味と受け取られかねない場合, またその逆の場合もあったことが知られる.

ここで, 金田一・知里説を再び取り上げるなら, ár の両義性の解消への欲求があって, もともと「真の」という意味であった siné が ár の 1 を意味する領域に進出したと考えることができるかもしれない. siné が 1 を示すようになる以前, もっぱら ár が 1 を示していたのではないか, という可能性である. もしそれが正しいのなら, 1 の意味を担う ár が新興の siné に駆逐されつつあることが現代に残された口承文芸のテキストに見られるということになる. しかし先に述べたように, siné が「真の」という意味を持っていたという証拠はないのであるから, これは弱い仮説と言うほかない.

5. 強調の機能をもつ ár

ár はある種の強調を示すためにも用いられる．これは ár の第三の用法である（先にも触れたように siné にはこの用例は全く見られない）．

（17）*ar* hekachi まったくの子供，*ar* teinep まったくの赤ん坊：*ar* hekachi / *ar* teinep / korachi ankuru **まるで**子供｜**まるで**赤ん坊の｜如くなる人（金成，金田一 1959: 198）

（18）*ar* herepash はるかな沖へ：*ar* herepash / atui tomotuye / paye-an aine **遥かなる**沖合ひへ｜海原を横切り｜行き行きて（久保寺 1977: 454）

（19）*ar* shinen たった一人：Tane anakne Okikirmui *ar* shinen newa tush ani.（仲間たちが倒れ）今やオキキリムイは**たった**一人になって（銛の）綱を握った．（知里遺稿：44．日本語訳は切替．shinen「一人」は shine（=síne 1）の名詞形）

1 あるいは「二つ一組の片方」の概念と，強調の機能との間にはなんらかの心理的な連絡があったことは疑いえない．これは金田一・知里説に都合のいい事実となる．

6. ár から派生した二つの単語 eár，oár

次にこの論文のテーマと密接に関係している ár の二つの派生語 eár と oár を見ておきたい．

ár に機能がまだよく分かっていない接頭辞 e- がついた eár は，「ただ 1 つの」という 1 を強調した意味で用いられる．eár が「二つ一組の片方」の意味を示す例，および純粋な強調の機能だけを示す例は見つからない．

（20）*ear* ay ただ一本の矢：*ear* ay ari / sine ikin ne / upokor humpe / ci sirkocotca 私は**ただ一本の**矢で｜一度に｜親子の鯨を｜仕留めた（切替 2003: 177. sine ikin ne「一度に」については後に述べる．）

（21）*ear* kik ただ一撃：*ear* kik ne / araike ruwe ne 私は彼を**ただ一**撃で｜殺した（金田一 1931: 578）

（22）*ear* kabarbe ただ一枚の薄衣：ami kosonte / ayaikoante / *ear* kabarbe / ayaikonoye. 我が着る小袖｜我脱いで｜**たゞ一枚**の薄物を｜我身にまとう．（金成，金田一 1966: 306.）

次の「全く」を意味する副詞は Batchelor の辞典にあるものだが，文字どおりの意味は「ただ一列になって」であるから（ikin←ikir 列），1 の概念と強調の機能とが近い関係にあることがよく示されている．とは言っても，これは eár の「ただ一つ」の例であって，単なる強調の例ではない．強調はこの形式全体が持つ機能である．

（23）*ear*-ikin-ne *adv*. Thoroughly. Well. Entirely. Quite.（Batchelor 1938: 100）

これは次のように用いられる．

（24）ekoikian a yakka / *earikinne* / eepokpaan wa / ikiani ka / somone ruwene. 我汝を打ったけれど｜**全く**｜我汝を憎んで｜やったことでも｜ないのだ．（金成，金田一 1966: 340）

ear-ikin-ne に対して sine ikin ne には「完全に」などの意味はなく，「一度に」「同時に」という意味で用いられる．先の例文（20）の二句目にそれが示されている．

ár に機能がよく分からない接頭辞 o- がついた oár は，「二つ一組の片方」の意味か，強調の機能かどちらかを示す．oár が 1 の概念を示す用例は見当たらない．

まず「二つ一組の片方」の例から．

（25）*oar* arkehe 片一方の端：*oar* arkehe / oterke ko / *oar* arkehe / hotari **片一方の**端を｜踏むと｜**片一方の**端が｜上がる（切替 2003: 152．火に当たってゆがんだ炉ぶち木の様子．árkehe は ár の自立形だから oár árkehe は「片一方の片一方」ということである．片一方には二つある．その片一方ということ．この「片一方の片一方」という解釈はアリュート語学の大島稔氏がはじめて気づかれたものである．）

（26）*oat* cikiri 片足：*oat* cikiri / otuimaasi / *oat* cikiri / ohankeasi **片**足を｜遠くに

立て｜**片**足を｜近くに立てる（切替 2003: 64. 飛ぶ鳥を狙って弓を引く情景.）

次のものは強調の機能を示す例である.

（27）*oar* teinep まったくの赤ん坊：eani *oar* teinep ene / pon yarpepo ane wa お身は**全くの**赤子であったし｜私は幼い女児であって（金成，金田一 1964: 83）

（28）*oar* apa-eaikap まったくみつからない：Newa tapne / pon awen-yupi / huraha at / apkor humash ko / *oar* apa-eaikap / ruwe-an. どこからか｜若いわたしの兄さん｜の匂いがある｜ような気がしたが｜**全く**わたし発見できない｜ことだよ，まあ！（金成，金田一 1963: 220）

以上見てきた eár，oár の意味・機能を ár と対比してまとめると次の表のようになる（参考に siné も加えてみた）.

	二つ一組の片方	1	強調
ár	○	○	○
eár	×	○	×
oár	○	×	○
siné	×	○	×

この表から eár と oár が相補的であることが明らかになる．ただし eár が単純な 1 の概念ではなく，強調された 1 の概念を示すことは上で見た．また ár の機能負担量がなかなか重いこともわかる.

7. 1 の概念が 2 の概念より後に成立したという見解

ドイツ青年文法学派の Brugmann（1904: 363）は，印欧諸語における 1 を示す単語に二つの祖形 *oi-no-s と *sem- をたてて，次のように述べている.

> Zu dem abstrakten Begriff ‘eins’ kam man von verschiedenen sinnlichen Vorstellungen aus.

*oi-no-s の示す「一」の概念は，beide「両方の」，alle drei「三つごとの」などと対立する gerade der「まさにその」，nur der「ただその」という表現（Ausdruck）から生じたとされている．また，*sem- の語源的な意味は zusammen「一緒に，集まって」とされている（Brugmann 1904: 363–364）．ここでは，印欧祖語において二つの形式が並立していたことの意味，および 1 を示す数詞と 2，3 などを示す数詞が成立した時系列的前後関係が暗示されるにとどまっている．

泉井久之助（1978: 189–192）は，印欧諸語において 1 から 10 にいたる数詞のうち一致が乱れるのは 1 であって，ある印欧語の 1 は *sem- にさかのぼり，別の印欧語の 1 は *ei(no)- にさかのぼるということを述べている（*oi- と *ei- は同じ形態素の交替形）．英語では *sem- は same として現れ，*ei(no)- は one ないし冠詞の an として現れる．さらに泉井は *sem- は「一つにまとめる，集める」という意味を，*ei(no)- は「いくつかのなかから特に一つを抽き出して示す」という意味を持つものだと推定している．前者についてはドイツ語の sammeln などを，後者についてはラテン語の ûn-icus を引き当てている．泉井は次のように述べ，より踏み込んだ認識を示している（泉井 1978: 191）．

> この事実（数詞 1 に対して *sem- と *ei(no)- の二つの祖形が立てられるということ―切替）は一つの原印欧語域の内部において，〈2〉以上の数詞は各方言域を通じて，すでに共通の表現要素が一貫して行われていたのに対し，〈1〉の数詞についてだけは，その表現要素の定立に，なお選択の余地があったことを示している．

また，「純粋に数詞を必要としたのは「二」からである」（泉井 1978: 192）とも述べている．

我々は，ものを数えるということを当たり前の行為だと思っている．しかし，何にせよ数を唱えながら指折り数えた幼児期を思い起こせば，数えるということが決して a priori なものでもなければ，自然に習得されるものでもない，なかなか高度な技術を要する行為であることに気づく．その行為を数理哲学のラッセル（Russell 1919/2002: 16–17）は次のように規定している．

> The act of counting consists in establishing a one-one correlation between the set of objects counted and the natural numbers (excluding 0) that are used up in the process.

ものを数えるためには，その支えとしての数詞の体系が成立しているか否かはともかく，1から始まる自然数の系列が概念として成立していなければならないというのであろう．確かに我々は，1から始めて1を繰り返し加えればあらゆる自然数にたどり着けることを知っている．この自然数の系列も我々は当たり前のことと思っている．しかしラッセルは言う（Russell 1919/2002: 2–3）．

> To the average educated person of the present day, the obvious starting-point of mathematics would be the series of whole numbers,
>
> $$1, 2, 3, 4, \cdots \text{etc.}$$
>
> Probably only a person with some mathematical knowledge would think of beginning with 0 instead of with 1, but we will presume this degree of knowledge; we will take as our starting point the series:
>
> $$0, 1, 2, 3, \cdots n, n+1, \cdots$$
>
> and it is this series that we shall mean when we speak of the "series of natural numbers"
>
> It is only at a high stage of civilisation that we could take this series as our starting-point. It must have required many ages to discover that a brace of pheasants and a couple of days were both instances of the number 2: the degree of abstraction involved is far from easy. And the discovery that 1 is a number must have been difficult. As for 0, it is a very recent addition; the Greeks and Romans had no such digit.

ラッセルは，「まして1が数であるという発見は困難であったに違いない」と断定しているが，その根拠は述べていない．また，先に引用したように，数えるという行為が1から始まる自然数の系列の成立していることを前提にしているならば，2の概念があって1の概念のない文化では数えるという行為が成り立たないことになる．数えるという行為が成り立たないのに，2の概念が存在するという

のはどういうことであろうか．説明不足だと思う．そうした欠陥はあるものの，ラッセルの説は有史以前のことを念頭に置いた魅力的な説である．自然数の系列がまだ成立する前に，つまり一般に数える技術が成立する前に，2 などの概念が 1 より先に成立しえたというふうにこの説を理解すべきと思う．

このラッセルの説とあるいは関係があるかもしれないが，1 が数でないということを心理分析学のユンクが述べている．ユンクはそう考える理由を 3 の象徴性について述べた論文の中で，Macrobius という中世の哲学者を典拠としつついくらか具体的に説明している（Jung 1953: 118）．1 が 2 から生じたという考えもここにみられる．

> The number one claims an exceptional position, which we meet again in the natural philosophy of the Middle Ages. According to this, one is not a number at all; the first number is two. Two is the first number because, with it, separation and multiplication begin, which alone make counting possible.

これを河合隼雄（1977: 101）は次のように敷衍している．

> 二の象徴性について，ユンクは中世の哲学者の考えを援用しながら，人間にとって最初の数は一ではなくてむしろ二ではないかと述べている．つまり一が一であるかぎりわれわれは「数」ということを意識するはずがなく，何らかの意味で最初の全体的なものに分割が生じ，そこに対立，あるいは並置されている「二」の意識が生じてこそ「一」の概念も生じてくると考えられる．

これらの説がもし正しいのなら，つまり，1 の概念が 2 の概念の成立を待って生まれたというのが正しいのなら，ár の 1 と「二つ一組の片方」という二つの意味に新旧の順番をつけることができるのではなかろうか．つまり，ár はもともと「二つ一組の片方」を意味し，ブルークマンの言葉を使えば，「具象的な観念」を表していたが，後に純粋な数 1 をも示すようになったと言えるのではなかろうか．冒頭で，数詞 1 は数 2 の概念から生まれることがありうると述べたが，それはこのことを指している．さらに金田一，知里の仮説を受け入れたうえで想

像すれば，1 を示すようになった ár の多義性を解消するため，同時に，1 の概念と強調の機能との間に近い関係があったことから，「真の」を意味していた siné が 1 を示すようになり，1 を示す ár はそれに押されて衰え，通り一遍の観察者の目を逃れる程度にしか用いられなくなったのではなかろうか.

あるものが一つあるとする．その事態そのものの認識能力は人類普遍であり民族差はないが，そこに 1 という数の概念を投影できるか否か，また，そのような概念が言語化されているか否かはまた別の問題である.

最後に，つぎのような推察は決して不合理とはいえないであろう．もっとも早い時期のものとして，数詞を持たない言語というのがまず考えられる．それより進んだ段階として，2 あるいは 2 と 3 を示す数詞は存在するが 1 を示す数詞を欠いているような言語はありはすまいか（Pre-Ainu 期の古い時期のアイヌ語はそうだったのではなかろうか）.

また，1 を示す数詞があるなら 2 を示す数詞があるはずであり，2 を示す数詞がないのに 1 を示す数詞があるような言語は存在しないのではなかろうか．このような implicational universal を見いだすことはできないのであろうか．識者の教示を待ちたい.

参 考 文 献

Batchelor, J. (1938) *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Iwanami.

Brugmann, Karl (1904) *Kurze Vergleichende Grammatik der Indogermanischen Sprachen.* Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.

知里真志保（1936/1974）「アイヌ語法概説」『知里真志保著作集』第四巻：3–197. 東京：平凡社.

――――――（1956/1984）『アイヌ語地名小辞典』北海道出版企画センター.

――――――（遺稿）北海道文学館所蔵 CM91.

Dettmer, H. A. (1989) *Ainu-Grammatik Teil I: Texte und Hinweise.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

服部四郎（1964）『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店.

泉井久之助（1978）『印欧語における数の現象』東京：大修館書店.

Jung, C. G. (1953) “A Psychological Approach to the Dogma of the Trinity.” *Collected Works of C.G. Jung*. 11. Pantheon Books. Translated from “Versuch zu einer psychologischen Deutung des Trinitätsdogmas.” *Symbolik des Geistes.* Zurich: Rascher. 1948.

河合隼雄（1977）『昔話の深層』東京：福音館書店.

金成まつ，金田一京助（1959）『アイヌ叙事詩ユーカラ集 I』東京：三省堂.

――――――――――（1961）『アイヌ叙事詩ユーカラ集 II』東京：三省堂.

――――――――――（1963）『アイヌ叙事詩ユーカラ集 III』東京：三省堂.

――――――――――（1964）『アイヌ叙事詩ユーカラ集 IV』東京：三省堂.

――――――――――（1965）『アイヌ叙事詩ユーカラ集 V』東京：三省堂.

――――――――――（1966）『アイヌ叙事詩ユーカラ集 VI』東京：三省堂.

切替英雄（2003）『アイヌ神謡集辞典』東京：大学書林.

金田一京助（1923）『アイヌ聖典』

――――――（1931）『アイヌ叙事詩ユーカラの研究二』東京：東洋文庫.

――――――（1935/1993）「数詞から観たアイヌ民族」『金田一京助全集』第五巻：98–120. 東京：三省堂.

久保寺逸彦（1977）『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店.

――――――（1992）『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道教育委員会.

村崎恭子（1979）『カラフトアイヌ語文法篇』東京：国書刊行会.

Russell, Bertrand (1919/2002) *Introduction to Mathematical Philosophy.* New York: Routledge.

佐藤知己（1995）『「蝦夷言いろは引」の研究解説と索引』北大言語学研究報告第 8 号，北海道大学文学部言語学研究室.

砂沢クラ（遺稿）「先祖の実話」北海道大学文学部言語学研究室蔵.

鷹部屋福平（1941）「アイヌ民族の使用したる計量の単位並に音の名称に関する研究」『北方文化研究報告』3.

田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館.

Tamura, Suzuko (2000) *The Ainu language.* Tokyo: Sanseido.

A Numeral Denoting ‘One’ in Ainu

Hideo KIRIKAE
(Hokkai Gakuen University)

This paper attempts to show that in Ainu the number ‘one’ can be referred to by the proclitic *ár* which means ‘one of a pair’ (*as-siki* ← *ar-siki* ‘his eye’) or ‘half’ (*ar-kewtemu* ‘half of his heart’), and also functions as an intensifier (*ar teynep* ‘a true baby’). Although *ár* is qualified to be a numeral semantically, it has not been treated as such in traditional descriptions.

It is arguable that in general a numeral denoting ‘one’ can be derived from the concept of ‘a half of two’ and that a typical case of illustrating this process is observed in Ainu.

（受理日　2005 年 10 月 26 日　　最終原稿受理日　2006 年 2 月 6 日）